



展望

2017年度の振り返り

学長 鈴木 志津枝



神戸市看護大学の法人化に向けて

神戸市看護大学は、1996年4月に看護系大学として設置されて以来、今年度で23年目を迎えました。いま、少子化に伴う18歳人口の減少が続く中、大学進学

者が減少に転じると予想される「2018年問題」が注目されています。このような厳しい状況の中で、大学間競争は今後ますます激しくなることが予想され、本学もこの競争を避けて通ることはできません。神戸市の「知の拠点である」神戸市看護大学として存在価値を示すとともに、ステークホルダーに対してより充実した機能を果たし、魅力ある大学として次世代に向けて発展していくためには、教育や研究活動を通して個性化や差別化を図るとともに、地域や社会の要請に応える取り組みをより一層、推進していく必要があります。

このような状況の中で、より効果的で効率的な大学運営を図っていくために、神戸市看護大学は、2019年4月1日より地方独立行政法人法に基づく「公立大学法人」への移行に向けて、最終準備の段階を迎えています。

現在、神戸市看護大学はこれまで培ってきた大学としての蓄積を基盤として、大学院博士後期課程をもつ看護系大学として高いレベルの水準を維持しつつ、社会の動きや保健医療二

ズを見据え、地域社会にこれまで以上に貢献するためにはどのような先駆的な取り組みが必要かを真剣に考えています。また、公立大学法人に移行した後の“大学のあるべき姿”を目指して大学改革について検討しています。

神戸市看護大学の発展に向けての決意

神戸市看護大学の法人化後の中期目標は未だ設定されていませんが、法人化後の大学の発展を検討していく中で、「地域にとっての神戸市看護大学の存在価値とは」を常に考えてきました。本学の役割は、地域の保健・医療・福祉に貢献できる卒業生や修了生を地域とともに育成し地域社会に送り出すこと、そして地域の課題解決に有用な研究成果を効果的に社会に発信することで、地域社会に貢献することであると考えます。

大学間競争が今後ますます激しくなる中で、大学が生き残っていくためには、教育・研究活動、地域貢献活動、大学運営への積極的参加の客観的指標を明確化して、教職員の水準を保ち精鋭化を図っていく必要があります。

神戸市看護大学は、規模が小さいゆえにその目的を明確化することができ、組織的にも小回りが利くという利点があります。この利点を最大限生かし、力を結集して法人化の準備を行っていきましょう。今年度は、法人化後の神戸市看護大学にとって重要で意味のある1年になると思います。身を引き締め、取り組んでいく必要があると考えます。

なんでもかんでもリポジトリ？

—これからの大学図書館の役割—



図書館長 渡邊 定博（専門基礎科学領域 医科学分野 教授）

機関リポジトリという言葉をご存知ですか？英語のrepositoryには、保管場所とか収納倉庫などの意味がありますが、機関リポジトリというと、大学や研究機関などで、自らが所有している知的財産をデジタル情報として貯めておくことを意味します。具体的には、出版した学術論文や、学術的価値の高い貴重な資料、あるいは講義資料などを、デジタルアーカイブとしてWeb上で閲覧できるようにすることです。

近年、文科省が機関リポジトリを推進する方針を掲げ、平成25年4月からは、博士の学位を取得した場合に、学位授与に係る論文をインターネット上に公開することが“義務化”されました。従って博士課程を有する大学のホームページ上では、その大学が授与した博士号に関する論文を閲覧することが可能となっています。本学でもこの流れに沿って、「学位論文」と「神戸市看護大学紀要」のリポジトリ公開を行っています（<https://kobe-ccn.repo.nii.ac.jp>）。

ところで、このような動きは最近の図書館のあり方に大きな変化をもたらそうとしています。図書館と言えば、様々な分野の本が古い年代から最新のものまで書棚に整然と並んでいるというイメージがあります。図書館は、これらの文献資料の受け入れや管理をするとともに、いわゆるレファレンスサービ

スと呼ばれる資料情報の検索や提供を主な業務としてきました。しかしこれからは、これまでの業務に加えて、何をリポジトリとして公開するかを判断することが重要になりつつあります。図書館関係の各種研修会でも、リポジトリ登録に図書館がどのように関与するかがしばしば話題になっています。

リポジトリ公開では、資料に著作権がある場合には困難なハードルが発生します。また、どのような資料をリポジトリで公開するか、扱う資料の範囲についても意見は様々です。文献資料だけではなく、写真（立体形状も含む）や動画、あるいは、論文には未発表だが公開する価値のある実験データ、果ては退職した教員のプロフィールも含め、大学がコントロールできる全てのコンテンツがリポジトリの内容となるといった極端な意見まであります。ここまでくると個人情報との関連も考える必要があるかも知れません。

これらの多様な情報とそれにかからむ権利を処理することが、これからの図書館に求められる可能性があります。そして大学が機関リポジトリをどのように運用しているかが問われる時代がやってくるかもしれません。その意味では、図書館が大学の“知的財産の発信窓口”として重要な役割を担う事になるでしょう。

果たしてこれからの時代、機関リポジトリがどのように活用され、どのように発展していくのか、楽しみであるとともに心配でもあります。

1年間の大学の動き

南豪州の災害レジリエンスセンターの活動について

学生部長 池田 清子（療養生活看護学領域 慢性病看護学分野 教授）

今回、在外研究でお世話になったフリンドース大学（Flinders University）は、1966年に設立されたオーストラリア南オーストラリア州アデレードにある公立大学です。校名の由来は探検家マシュー・フリンドースとされています。当大学は2017年に新学長が英国から着任し、新学長の方針で従来14の学部が7つに統合されました。新しい学部組織では、看護はヘルスサイエンス（健康科学、保健科学）学科となり、従来の看護学、助産学に加え、栄養学、運動科学、作業療法、視能訓練、緩和ケア、理学療法、言語療法、高度リハビリテーション、放射線治療、高齢者ケア、長期的ケアに関する多くの領域が統合されました。私は看護学がヘルス科学の領域の一つであることを改めて実感し、Flinders University Torrens Resilience Institute (TRI) のセンター長とスタッフが看護職から構成される理由も納得できました。

今回の在外研究の目的は、TRIが、1) どのようにResilienceの概念を実践に連結させようとしているのか、2) 研究結果をどのように実践・教育にフィードバックしているのか、を学ぶことでした。

TRIの活動を見ると、まず多領域に跨るResilienceの概念分析を行い、各領域に見出された共通点と課題を明らかにし、次にResilience概念に基づき地域の災害レジリエンスを測定するツールを開発し、10の地域で測定を試み、測定を完了した地域では、災害レジリエンスのどの部分が弱いのか、リーダーチャートを用いて視覚的に理解できるように工夫がされていました。結果をフィードバックされた地域は、災害リスクの備えについて弱い部分を強化するため、新たなデータを得るための調査

計画を検討したり、訓練を実施するなどの計画を策定します。これら一連の研究成果は報告書にまとめられ、Web上に公開されていました（Disaster Resilience Scored Toolkit and Practice Guideline. -Final Report, June 2015-）。また、災害リスクを知り備えることは、地域（世帯）単位も重要ですが、大規模災害ではインフラや電力会社、交通運輸機関などの民間企業の協力も必須です。そこで、TRIのセンター長であるアーボン教授は、行政機関のトップや民間企業の管理職レベルの人を対象にエグゼクティブ教育プログラムを開講し、管理職の災害リスクの啓発と自らが果たす役割の重大さに気づく意識改革を行っていました。さらに、地域レジリエンスの測定ツールは大学の災害ヘルスの授業にも活用され、研究・実践・教育を連動させていることがわかりました。以上のことから、日本では災害レジリエンスを個人単位で捉えがちですが、今後は地域単位で捉えること、それはすなわち超高齢社会の地域力を高める地域包括ケアにもつながることだと考えます。



(左) 教授：Paul Arbon（センター長）
研究領域：地域のレジリエンス、ヘルスケア、災害教育等
(右) 講師：Mayumi Kako（Board Member）
研究領域：集団に関する研究、災害における看護研究、災害からのリカバリーにおける看護の役割

フィリピンでの研究から学んだこと

山下 正（健康生活看護学領域 地域・在宅看護学分野 助教）

私は大学院生の頃からフィリピン共和国（以下、フィリピン）における産前産後の女性の健康に関する研究を続けています。今回は現地のフィールドワークで印象的だったトピックを紹介させていただきます。

フィリピンではバランガイ・ヘルス・ワーカー（Barangay Health Worker, BHWと略します）と呼ばれるボランティアが活動しています。バランガイ（barangay）とは現地語で村という意味で、BHWは保健センターに登録されたボランティアの名称です。彼女達は無償で活動をしています。ほとんどのBHWは女性で、子育て中の方や子育てがひと段落した方が多い印象です。BHWは家庭訪問を通じて保健センターが行っている予防接種や乳幼児健診、乳がんや子宮がん検診を住民に周知したり、体調が悪い方には受診勧奨をしたりします。私はフィリピンの女性の健康調査を行うため、いつもBHWの家庭訪問に同行させていただいています。BHWは、地域の中でどの家庭が困っているか、どの人が病気を患っているか、産前産後の体調が悪い妊産婦がどこに住んでいるかなどを独自のネットワークを通して把握しています。BHWと一緒に行動する中で私が感じたことは、BHWはBHWとして誇りをとても強くもっており、健康のことで困っている住民を助けたいという気持ちが大変強いということです。かつてBHWと10代前半の母親の家に訪問をしたことがありました。フィリピンの方は比較的陽気な方が多いのですが、その女性

は今後の子育てに大変強い不安を抱いているようでした。BHWはその女性が若年で、パートナーがおらずに子育てをしていることをすでに知っており、BHWはその女性に会った際に「大丈夫？産後の体調はどう？赤ちゃんはどう？」と優しく声をかけていました。また、同居していた祖父母には家族皆で彼女をサポートするように伝えていました。フィリピンでは、同じ市内でも貧困による健康の格差が大きくあります。また、社会資源が十分でないため、病気や障害を家族員のいずれかが抱えている家庭も少なくありません。そのため、BHWの存在は地域において欠かせない存在となっており、健康に心配を抱えた家族にとって大変心強い存在になっているようでした。このことを通じて、私は日本においても民生委員さんなど地域で活動されている方の存在がいかに大切かを改めて考えるようになりました。

今後は、お世話になったフィリピンの方々の健康向上に寄与できるような研究成果を出し、そのことで恩返しをしていきたいと思っています。



BHWや保健センター職員と筆者

COC事業の終了：COC認定校としての継続

地域連携教育・研究センター長 石原 逸子（基盤看護学領域 基礎看護学分野 教授）

地の拠点（Center of Community;以下COC）整備事業とは、文部科学省が大学改革の実行プランの一つとして、地域にある大学資源（人材）を地域貢献に活かし地域再生・活性化の核となる大学の形成を目的として、平成25年3月下旬より公募を開始したことが始まりです。具体的には、少子高齢化、地方の過疎化と都市の過密化、社会経済的、健康格差の増大を背景に、COC事業を実行に移すことで教育・研究・地域貢献において新たな大学像の確立を狙いとしたものです。本学は募集初年度に「地域住民と共に学び、共に創るコミュニティケアの拠点づくり」を課題名として申請し、319件の申請中52件中の1件として事業選定されました。事業期間は平成25年度～平成29年度の5年間で、当初の総事業費は138,180千円でした。本稿では、5年間の活動について簡単に紹介し、様々な活動を通じて得られた成果とそれに基づく展望について述べたいと思います。

本学が取り組んだCOC事業の概要は、神戸市が保健医療計画のなかで掲げていた4つの課題、①訪問看護人材の育成、②医療連携の強化、③地域ケアシステムの構築、④地域住民ネットワークの構築に対し、大学の教育・研究資源の活用によりこれらの課題への対応を行って行くことでした。例えば、①に対しては訪問看護教育の強化としてカリキュラムを質的・量的に充実させ、訪問看護への志向性の高い人材を育成する。②に対しては、8領域の看護学実習において継続看護について共通の目標を掲げ、施設から在宅への移行支援について学修を深めること。③については、地域包括ケアを支える様々な

関係者間の多職種連携の在り方の教育と研究を行うこと。④については民生委員・児童委員や地域の自治会、地域住民との協働により地域住民間のネットワークづくりに貢献すること等、です。

これらの取り組みの成果としては、ある程度の目標は達成でき、特に、地域の住民の方々には学外での演習が受け入れられ、コミュニティづくりの支援に一役を担えたと考えています。さらに、地域での連携教育を受けた卒業生からの調査結果では、本学での教育ボランティア導入授業や地域住民の健康と生活の理解を深める科目群は、就職後の臨床での看護実践に役に立つとした回答が8割以上であり、COC事業の成果と考えています。このような結果から、平成18年度から地域の健康増進、地域での療養生活を支援する枠組みをカリキュラムの中に取り入れ、地域の中にある大学として貢献してきたことが実を結んできていると強く感じています。

今後、現在までの地域貢献活動の成果をより充実させていくための人材育成とはどうあるべきか？COC事業を通して得られた成果と共に見えてきた課題は、身近な地域に目を向け、地域貢献活動に参加できる学生たちの主体性をどう育ていくかです。これからは、我々教員が理想とする知識や技能を授業科目に組み込み、目標と到達すべきレベルを示す形式ではなく、学生たちが何を見出し、考え、学ぶのかを大切に、彼らの能力発揮を後押できるような地域学習の場を提供することで自律性を育てていけると考えます。

COC課外演習「養父市高中地区での健康チェック」報告

小巻 京子（地域連携教育・研究センター 助教）

本学は、COC事業において学外でヘルスインタビューや健康測定を行っています。このようなCOC事業を通じて学生たちの地域志向性は高まっていると思っていますが、今回筆者がフィールドとしている養父市での活動に学生たちが興味を持ち、ボランティアとして手上げをしてくれました。本報告は、平成30年2月4日(日)に学生たちと行った養父市での課外活動について綴ったものです。

兵庫県但馬地方の養父市高中地区は、神戸市から約100km遠方の中山間地域にあり、全住民14名（8歳から98歳）、高齢化率71.4%の極小規模地区です。3名の女性で地区の入口にある「そば処」をきりもりされており、その女性以外のほとんどの方は農業（自宅用や出荷用）を営まれています。

今年は高中地区も雪が多く降り、当日は晴天でしたが、屋根の上や日が当たらないところには雪やつらが残っていました。

公民館で行った健康測定には、8名の男性が参加してください。身長、血圧、骨ウェーブ、酸素飽和度（SpO₂）の計測を行いました。来られた方々は、久しぶりの身長値の変化に驚かれたり、普段の血圧との比較や農作業が運動にもなっていることなど、賑やかに結果を見せ合っておられました。その後学生が、看護職として先輩の保健師が作成した手作りのパンフレットを使って「ヒートショック（急な血圧の変動による体調不良）」を起こさないよう注意喚起を行うと、「ヒートショックとは、血圧の上昇だけでなく、下降も含めた急な変化だとわかった。」との感想をきっかけに、「『体調がすぐれないときは入浴しない』とあるが、少し体調が悪くても入浴すると気分がよくなること

ある」という意見をいただくことができました。さらに、独居の方が「入浴時に何かあれば、周りの人に迷惑をかけてしまう。」という心配を漏らされ、養父市のような近隣との関係が濃厚な地域であっても、意外と日ごろの気配りが打ち明けられていない現状を知ることができました。

学生は、「気軽に受診することが難しいことから、受診しなければならぬタイミングを知ってもらう重要性」や「自分の体は人に任せず自分で守るんだという（セルフケア能力の高さ）」、「（98歳の方が病院や商店まで車で約20分かかる山間の）環境での生活に不安はたくさんあっても、希望を持ちながら生活できている（ことを支える地域のコミュニティの力）」を学ばせていただき、改めて地域とそこに暮らす人びとの健康との関連や、「その人らしく生きる」とはどういうことか、考える機会になりました。



在校生から

コーラルレインの活動報告

学部3年生 佐藤 友里乃

コーラスサークル、コーラルレインです。わたしたちコーラルレインは「歌・音楽の楽しさを伝えたい」「聴いてくれる人に癒しを」をモットーに日々活動しています。現在部員は1回生3人、2回生3人、3回生6人、4回生7人の計19人です。経験者・未経験者関係なく、歌うことが好き!音楽でたくさんの人と関わりたい!という気持ちを持っている学部生が集まっています。

活動は学内、学外問わず行っています。学内での活動は、神戸市看護大学学園祭「あざみ祭」への出演、卒業式や入学式などの式典での学生歌唱などです。神戸市看護大学の学生歌は卒業生が作詞・作曲されたものです。式典では「学生みんながあざみの花のようにしなやかに、強く、麗しく咲くことができるように」という気持ちを込めて歌っています。以前行われた神戸市看護大学の同窓会合併記念懇親会では、卒業生の方々の前で現在の学生歌だけでなく、専門学校時代や短期大学時代の校歌を斉唱させてもらうなど、貴重な経験もさせていただきました。また、学外では神戸市立医療センター中央市民病院や、なごやか垂水でのミニコンサート、近隣の商業施設でのカレッジ音楽祭への出演などを行っています。中央市民病院でのミニコンサートでは、毎年アンケートに感想を書い



ていただいています。その中には「一緒に歌を歌えて気分が晴れかになり、治療を頑張ろうと思えた」「最近の曲ばかりでなく懐かしい曲もあって楽しめた」という声がたくさんあり、授業や実習でなかなか練習できないときの心の支えになっています。学外での活動で幅広い年齢の地域住民の方々と関わる中で、聞いている人が笑顔になってくれたり、一緒に歌ってくれたりするとわたしたち部員もとても幸せな気持ちになり、音楽の力を実感することができます。

歌っている曲は「ドレミの歌」のような定番の合唱曲から「どんときも。」のようなJ-POP、他にもディズニーやジブリの挿入歌、主題歌など幅広いジャンルに渡ります。お年寄りから小さな子どもまで楽しめるように、歌う場所や時間帯・季節などを考えながら曲を選び、授業の合間や昼休みを利用して練習を行っています。

今後も歌・音楽の楽しさを感じながら、聴いている人に癒しを届けられるように、学内・学外問わず活動していきたいと考えています。

修了生から

看護師としての自分を振り返る

静岡県立静岡がんセンター 看護師 安藤 朋子

皆さん、こんにちは。私は神戸市看護大学13期生の安藤朋子です。広報誌用の文書を書くお話を頂き、今までの自分について振り返りました。

大学を卒業後、県内の病院で看護師として働き今年で7年目を迎えます。7年間という時間はあっという間でしたが、振り返ると鮮明に当時のことが思い出され、充実した時間を過ごすことができていたように思います。

看護師として働き始めて、患者さんの状態が正常か異常かを判断することの難しさ、一人で受け持つ患者数が多いことへの不安、全身状態が不安定な患者さんを受け持つことへの恐怖感があり、「私が実践する看護技術、提供する看護ケアが命に係わる」という重圧を感じながら働いていました。日々、不安や悩みが尽きることは少なかったのですが、そういう状況を乗り越えることができたのは、悩みや不安を共有できる同期や学生時代の仲間が存在があったからだと思います。

2年目以降も経験年数に応じた悩みや辛いことはありましたが、できることが増えてくることで達成感を得られるようになってきました。そして、一般病棟で働くうちに「最期まで生きることを支えるために私に何ができるのか」と考えるようになり、緩和ケア病棟で働くことにしました。緩和ケア病棟では学ぶことも悩むことも多く、働き始めて2年目ですが、人の生きる力に圧倒され、治療期との考

え方の違いに戸惑い、多職種で連携することの重要性などを感じる日々です。

一般病棟から緩和ケア病棟へ働く環境は変わりましたが、どの治療期であっても「患者さんや家族の話聞く」ことは非常に大切であると思います。患者さんや家族が話す言葉をそのまま聞くのではなく、その発言にはどのような気持ちが隠されているのか、表情、声のトーン、話し始めるタイミング、話すスピード、言葉の選択などを観察することで様々な情報を得ることができるように思います。その話を聞くためには、相手のペースに合わせる必要がありますが、時間に追われることの多い現場では難しいこともあります。しかし、話すことで得られる情報が治療方針や看護展開を変え、話すことができる、聞いてもらえるという安心感から患者さん、家族との信頼関係を構築するきっかけにもなるように思います。

私は学生時代にピアカウンセリングをしており、話の聞き方、相手の話を聞くことの大切さを学びました。そこでの学びが看護師になった今でも生かされているように思います。今後のために何をしておいたらいいか、何が必要か、ということは人によって違うと思うので、自身の興味のあることに参加し、色々な出会いをすることが大切かと思っています。

皆さんとともに働ける日を待っています。

平成30年度新任教員 自己紹介



人間科学領域 人文科学分野 准教授 藤木 篤

今年度より人間科学領域人文科学分野に所属することになりました、藤木篤と申します。専門分野は応用哲学・倫理学で、今年三月末まで、久留米工業高等専門学校で、技術者をを目指す学生に、技術者倫理や環境倫理学を教えていました。哲学や倫理学というと、一見看護学とは関係がなさそうですが、人間を対象にするという意味では、非常に深い繋がりを持っています。授業を通じて、自らたてた問いにしっかりと向き合い、考え

抜く態度と能力を身につけるためのお手伝いのできれば、大変嬉しく思います。

神戸は、学部生の頃から数えるとおよそ十年を過ごした場所であり、数えきれぬほどの思い出と、受けたご恩があります。今後、それ以上の時間をかけて、神戸の地に恩返しのできれば、とひとり意気込んでいます。学生、保護者、教職員の皆様、これからもどうぞよろしく願い致します。



健康生活看護学領域 地域・在宅看護学分野 准教授 丸尾 智実

健康生活看護学領域、地域・在宅看護学分野の丸尾です。これまで、病院や在宅で看護師として勤務し、他大学での教員経験を経て、本学に着任いたしました。

私はこれまで、自宅で生活する認知症のみられる方とその家族の方々、そして地域の方々になるべく穏やかに生活ができるように研究や活動を継続してきました。しかし、これまでの活動を通して、現在は‘認知症’という切り口ですが、これらは‘地域づくり’として皆さんの自宅や地域での生活の安寧に

つながると考えています。まだまだ地道で細々とした活動ですが、少しずつ拡大できるように取り組んでいきたいと思っています。

また、学生の皆さんには、広い視野を持ちながら、学問として看護を学んでほしいと願っています。私が尊敬している在宅や地域で生活する高齢の方のことを、学生の皆さんに関心を持って学んでいただけるように、講義や演習、実習などを通して一緒に考えていければと思っています。



療養生活看護学領域 慢性病看護学分野 准教授 小山 富美子

私はこのたび慢性病看護学分野に着任いたしました。どうぞよろしくお願いいたします。初めての教員生活で、学生のピュアな反応に感動したり、気が引き締まったりという日々を過ごしています。教員として学生と共に成長できるよう頑張ろうと、大阪からの片道1時間半、気合入れて通っております。これまでは大阪の企業病院、自治体病院、私学の大学病院で働き、管理も経験してきました。がん看護専門看護師としては15年目です。新しい職場で「心機一転のスタート」で

はありますが、本学の編入1期生としては懐かしい気持ちも混じった数か月間を過ごしてきました。この思い出深い神戸市看護大学で働く機会を頂けたことに感謝し、学生の皆さんと共に、より良い「ケア」とは何か、を探究していきたいと考えております。学生時代はあらゆる刺激から学び、吸収する力に満ちた素晴らしい時期です。是非、この学生生活に様々なことに関心を持ち、思い切り打ち込める経験をたくさん積んで欲しいと思っています。



基盤看護学領域 基礎看護学分野 助教 新澤 由佳

はじめまして。今年度、基盤看護学領域基礎看護学分野の助教に着任いたしました。出身は福岡県（柳川市）で、程よく田舎の町で育ちました。関西弁にも馴染んできましたが、まだ時々福岡の方言でしゃべってしまうことがあります。

私は本学の学部と大学院博士前期課程の修了生であり、母校で働くことを嬉しく思っています。臨床では、急性期の病院や乳腺専門のクリニックに勤めていました。また、博士前期課程では入院患者さんの睡眠をテーマ

に研究に取り組み、今後もより良い休息の援助や睡眠の援助について考えていきたいと思っています。

基礎看護学分野では、主に1年生から2年生の基礎看護学実習までの科目を担当しています。学生の皆さんのように私も頭を柔軟にし、日々の指導や研究において創意工夫をしながら、新しいことにもチャレンジしていきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

平成30年度新任教員 自己紹介



基盤看護学領域 基礎看護学分野 助教 吉川 あゆみ

山梨県生まれ、和歌山県で育ちました。その後、大阪や岡山で暮らし、この春から神戸へやってきました。初めての神戸、まだまだ知らないことばかりですが、少しずつ神戸の魅力を知っていければと思っています。

今、振り返ると、大学生活の4年間はあっという間に終わった気がします。実習や試験など、忙しい日々でしたが、なんだか楽しそうに過ごしていました。臨床現場では、看護

師としての責任の重さ、やりがい、時にはどうしたらいいかわからず悩むこともありました。そんな大変な臨床現場の中で、私にとって患者さんとの関わりが何よりも楽しい時間でした。また、大学院では研究の難しさや面白さを知り、幅広い視野を持つことの大切さを学びました。

学生の皆さんも、ぜひ多くの経験を積み、大学生活を素敵な4年間にして下さい!



健康生活看護学領域 地域・在宅看護学分野 助教 大瓦 直子

岐阜県で生まれ育ち、大学進学から名古屋で10年暮らしていました。結婚を機に神戸に引越し、今年で神戸2年目です。海なし県に生まれた私は、山も海もあり異国情緒あふれたおしゃれな神戸に住めるなんて、なんて幸運なのだろうと嬉しく思っています。趣味はTVドラマやアニメを観ることです。アニメを観ている時が一番のリラックスタイムです。

大学卒業後は大学病院で勤務した後、訪

問看護ステーション、介護老人保健施設で働いていました。経験が多いとはいえない時に訪問看護師に挑戦しましたが、訪問看護の仕事はとても楽しく、やってみてよかったなと心から思っています。教員は初めてですが、学生の皆さんにも訪問看護って楽しいな、訪問看護師になりたいなと少しでも思ってもらえるよう、実習や演習を通して訪問看護の魅力を伝えていきたいです。



療養生活看護学領域 慢性病看護学分野 助教 長尾 綾子

神戸生まれ神戸育ちです。夫と5羽のコザクラインコ（認知症の子、暴れん坊の子、小心者、飛ぶことに自信がない子、天真爛漫な子）と一緒に暮らしています。ストレス解消とリフレッシュのためにトレイルランニングにはまっていて、休日は六甲山系のどこかで走っていることが多いです。

一般企業で社会人を経験してから看護師となり、本学の編入学と大学院（博士前期課程）を修了しています。慢性期病院3年、急

性期病院15年、産業保健1年の勤務経験があり、そのうち6年はがん看護専門看護師としてがん看護に携わっていました。これまで教員経験がないので、学生さんや先生方と共に過ごす中で学びながら教員として成長していきたいと思っています。

看護は患者さんの日常生活に関わることができ、多職種と一緒に仕事ができる素敵な仕事です。学生の皆さんには看護を好きになってもらえるよう支援したいと思っています。



療養生活看護学領域 急性期看護学分野 助教 野寄 亜矢子

西神戸医療センターで勤務後、大阪府中の市民病院で勤務していました。長崎出身なので新人の頃は月に1度は実家に帰省していたものの、今では関西から抜け出せずに過ごしています。臨床では多くの患者さま・ご家族と出会い、そこからたくさんの看護の温かさを学んできました。

また、これまで私は新人看護師やスタッフ教育、臨地実習での学生の教育に携わり、その経験から看護教育に対する関心が高まり

ました。現場が求める看護実践能力と看護基礎教育で習得できる看護実践能力との乖離が指摘されている中、少しでも自分の臨床経験を活かし、その乖離を埋める役割ができればと思いました。そして、学生さんの成長を間近で支え、看護の楽しさ・面白さなど看護の魅力伝える役割を担うことができればと思っています。たくさんの経験を通して、一緒に楽しく看護を深めて行きましょう。

大学の1年間

行事*****

2017年	4月 5日	入学式
	5月27日	あざみ祭・ホームカミングデー・大学院ミニ受験相談会
	8月 5日～6日	オープンキャンパス
	8月24日	大学院入学試験(8月30日合格発表)
	9月 1日	編入学試験(9月13日合格発表)
	9月29日	卒業式 修了式
	9月30日	大学院特別講演会「現場発の事例研究から看護学を創ろう」
	10月28日	看護専門職講座「臨床経験を活かす新たなキャリア開発～CNEコース(看護教育学上級実践コース)の学びとその成果」
	11月18日	推薦入学試験(12月1日合格発表)
	11月25日	COC市民公開講座「地域住民が育てる大学生」
2018年	1月13日～14日	大学入試センター試験
	1月26日	大学院特別講演会「組織を変える看護部長の挑戦」
	1月27日	COCフォーラム「COC事業5年間の取組みと地域連携教育」
	2月10日	大学院博士前期課程入学試験(二次募集)(2月14日合格発表)
	2月16日	大学院助産学実践コース特別講義 「フローレンス・ナイチンゲールの統計学から助産学実践の研究姿勢を学ぶ」
	2月25日	一般選抜入学試験前期日程(3月7日合格発表)
	3月 3日	大学院オープンキャンパス
	3月12日	一般選抜入学試験後期日程(3月20日合格発表)
	3月14日～27日	シアトル海外看護学研修
	3月15日	卒業式 修了式
	3月17日～25日	ダナン海外看護学研修
	4月 5日	入学式
	4月 6日	特別講演会「ソーシャルメディア時代の情報リテラシーと看護職の責務」
	5月26日	あざみ祭・ホームカミングデー・大学院ミニ受験相談会
	8月10日～11日(予定)	オープンキャンパス

平成29年度 学生表彰受賞者

学生表彰とは…

学業成績が優秀で、他の学生の模範となるような学生や、ボランティア活動などで高い評価を受けた学生に贈られる賞です。

被表彰者・団体

◎学生活動

自治会 4年 大西 大己

ボランティア部 4年 5名(大石 美和・木島 郁美・佐藤 優佳・重田 あかね・藤本 綾香)

◎成績優秀者

4年 藤本 正真

人事

教員

退職

2017年	3月31日	後藤 由紀子	助 教
	3月31日	高山 英子	助 教
	3月31日	加利川 真理	助 教
	3月31日	有本 梨花	助 教
	3月31日	宮下 ルリ子	助 教
	3月31日	蒲池 あずさ	助 教
	3月31日	石井 久仁子	助 教
2018年	3月31日	相原 洋子	准教授
	3月31日	井口 悦子	講 師
	3月31日	清水 昌美	講 師
	3月31日	福重 春菜	助 教
	3月31日	原田 三奈子	助 教
	3月31日	春名 寛香	助 教
	3月31日	小巻 京子	助 教
	4月30日	狩野 由紀子	助 教

採用

2017年	4月1日	原田 三奈子	助 教
	4月1日	細川 由美子	助 教
	4月1日	滝川 由香里	助 教
	4月1日	坂口 豊代	助 教
	4月1日	小巻 京子	助 教
	9月1日	狩野 由紀子	助 教
2018年	4月1日	藤木 篤	准教授
	4月1日	丸尾 智実	准教授
	4月1日	小山 富美子	准教授
	4月1日	新澤 由佳	助 教
	4月1日	吉川 あゆみ	助 教
	4月1日	大瓦 直子	助 教
	4月1日	長尾 綾子	助 教
	4月1日	野寄 亜矢子	助 教

平成29年度国家試験合格状況

	保健師	看護師	助産師 (大学院)
受験者数	20名	100名	8名
合格者数	18名	99名	8名
合格 率	90.0%	99.0%	100.0%

平成29年度学部卒業生・大学院修了生

学 部 卒 業 生	109名
大学院博士前期課程修了生	22名
大学院博士後期課程修了生	2名

平成30年度入学生

学 部 1 年 次	95名
学 部 3 年 次 編 入	10名
大学院博士前期課程	21名

オープンキャンパス 予告

2018年度のオープンキャンパスは2018年8月10日(金)、11日(土)に実施予定です。本学入学をお考えの方をご存知でしたら、どうぞお声をかけください。詳細は本学HPをご覧ください。

編集後記

「回廊」は2004年の創刊以来、本学の学報として1年間の行事開催や人事などの記録を残すとともに、教職員や学生が情報を発信し共有する場として、日常の様々な活動や本学をとりまく動きを採り上げて毎年度末に刊行されてきました。このたび、新年度に本学に着任した教員の紹介ページや昨年度の学生表彰の情報を加えて発行時期を7月に変更し、新たな形で「回廊」15号をお届けすることになりました。新しい「回廊」が本学の現在を伝える広報誌としての役割を果たすとともに、従来に増して地域の皆様や学生の保護者の皆様、また学生、教職員の交流の一助になることを願っております。

神戸市看護大学

〒651-2103 神戸市西区学園西町3丁目4番地
 電話：078(794)8080(代表) FAX：078(794)8086
 E-mail：soumuka@tr.kobe-ccn.ac.jp Web：http://www.kobe-ccn.ac.jp